

2019.5.16  
vol.75

# シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画  
を  
読む

## 本日の上映作品 『素晴らしき放浪者』



5月16日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

主人公ブデュは気ままな放浪者。けれど、この世はすでに楽しくない -- と一足飛びにあの世行きを図ってセーヌに身を投げた所、河縁の古本屋の親父に助けられ、英雄とされた彼のその家に居候。持ち前の豪胆さで奥方を寝取るが、旦那の情婦だった女中のアンヌ・マリともネンゴロになり、結婚を決める。が、式の当日、舟で河を往くお披露目の最中、川面に浮かぶ蓮の花に手を伸ばし、舟は転覆。山高帽一つ残し……。

監督：ジャン・ルノワール

出演：ミシェル・シモン

シャルル・グランバル

製作：1932年 フランス モノクロ 84分

『レシピドシネマ』しあわせを運ぶ29のおいしい映画	川端 麻祐子／著	ゴマブックス	778.04
『ウイスキーアンドシネマ』琥珀色の名脇役たち	武部 好伸／著	淡交社	778.04
『映画のグルメ』映画と食のステキな関係	斉田 育秀／著	五曜書房	778.04
『シネマ・バーで乾杯』	村上 清和／著	新風舎	778.04
『映画でクラシック!』	西村 雄一郎／著	新潮社	778.04
『映画の中のオペラ』	中野 京子／著	未来社	778.04
『シネマと書店とスタジアム』	沢木 耕太郎／著	新潮社	778.04
『映画の中の本屋と図書館』	飯島 朋子／著	日本図書刊行会	778.2
『文学と映画のあいだ』	野崎 敏／編	東京大学出版会	778.04
『世界文学をDVD映画で楽しもう!』	大串 夏身／著	青弓社	778.04
『DVD映画で楽しむ世界史』	大串 夏身／著	青弓社	778.04
『列車映画史』特別講義 芸術の条件	吉加藤 幹郎／著	岩波書店	778.04
『映画でみつけた素敵なことば』	岡田 喜一郎／著	佼成出版社	778.04
『女と男の名作シネマ』極上恋愛名画100	立花 珠樹／著	言視舎	778.04

## コラム『素晴らしき放浪者』

### ブーデュというおっさんが無茶苦茶しまくる物語 K.M.

今回の上映作品は、戦前のフランス映画界を代表する映画監督の一人、ジャン・ルノワールが1932年に製作した『素晴らしき放浪者』です。ジャン・ルノワールが世界最高の監督の一人であるという評価は、日本においても今や多くの人に共有されるようになっていますが、彼の30年代の作品は、同時代のジュリアン・デュヴィヴィエ、マルセル・カルネ、ルネ・クレールの作品ほど知られてはいないようです。実はこの作品も、日本公開は製作の45年後の1977年でした。調べてみると、この年のキネマ旬報15位にランクされていましたが、あまり話題にはならなかったようで、私も今回上映することになって初めてその存在を知りました。

DVDによる下見に先立って、ネットで拾い読みした情報の中には、「とんでもなくアナーキーで型破りの、でたらめで破廉恥な傑作」というのもあったりして、後味の悪い作品だと嫌だなと思いつつ鑑賞したのですが、それは杞憂でした。セーヌ河畔の古本屋の主人レスタンゴワは、セーヌ川に身投げしたホームレスのブーデュを、何気に救い自宅に連れて帰る。ところがブーデュは、命を救ってもらったことをまるで感謝しないばかりか、常識では計り知れない奔放な行動を連発し、プチブル階級である主人一家にトラブルをお見舞いしていく・・・、というお話です。“自由”というテーマの光と影を、生き生きと映像世界に体現した素晴らしい作品でした。寓話的な物語でありながら説教臭さは皆無で、軽妙な風刺コメディのような後味でした。

作品中には、以下の深読みのヒントになるようなキーワードが出てきます。

- ①レスタンゴワが苦学生に与えた本が、自由思想家ヴォルテールの著作本
- ②レスタンゴワがとても大事にしていたのが、バルザックの稀覯本『結婚の生理学』
- ③ブーデュが店頭で追い返した顧客が求めていた本が、ボードレールの詩集『悪の華』

しかしこれらについては、私にほとんど知識がなく、今回は深読みを断念しました。代わりに、最近ネットに投稿されているこの作品のユーザーレビューをいくつか紹介します。

・上質で上品な笑いが満載。放浪者というか、ただの浮浪者で、命の恩人に対してやりたい放題。実に厚かましく教養も常識もない。でも、なぜか憎まれもせず飄々と生きている。生活を引っ掻き回される書店主たちも、お人よしで快樂的。どちらもお気楽で面白い。(ルクレ)

・ルノワールの後の作品では気づかないようなヌーヴェルヴァーグっぽさと、やはりミシェル・シモンの唯一残された芸人としての証拠として、歴史的な名作に入れておきましょう。(chokob)

・主人公は確かにブーデュなんだろうが、私にはレスタンゴワの視点でしかこの作品世界を捉えることができない。(Yasu)

・映画の中に教訓をもちこむことへの、自由意志に基づく断固たる拒否を感じ、そこがフランス風に知的だ。型破りなキャラクターに見ている我々もが激怒し混乱し疲れ果てる。ミシェル・シモンの演技の巻き込む力は確かに見ものだが、ここまでアクが強いのは好みではない。(ジェリー)

・ヌーヴェルヴァーグに先行すること、なんと30年。ルノワール監督って凄い。(甘崎庵)

・ミシェル・シモンの、破壊衝動としなやかさが同居したオモシロすぎる身体表現に、見ている声を上げるしかない。(夢里村)

・いいなあ、河にぷかぷか浮いて現れて、またぷかぷかと去っていく。(動物園のクマ)

・社会性、娯楽性、芸術性の三者共存が無理なく果たされている。制作年を考えると画期的。(町田)

<追記>作品中に、最初の夜とその翌朝、終わり近くの3か所で、ノートルダム大聖堂の画像が出ます。それから、ブーデュがセーヌに飛び込んだ橋は、「ポン・デ・ザール橋(芸術橋)」です。

## 4/18 『黄色いリボン』の感想

- ・70代の男性です。子ども時代によく西部劇を観ました。胸躍る活劇でしたが、今観ると「複雑な思い」です。子どもの頃は、勧善懲悪のつもりで、拍手喝采を送ったのですが、今は先住民のインディアンを悪者扱いにしてよいのかと。時代が変わったんですね。今でも止まぬ、人種・民族・宗教の違いによる衝突についてつくづく考えさせられました。人間はなかなか成長しないのですね。これから外国人をいっぱい受け入れていかないと国が維持できない日本にとって、深く考えさせる課題でした。迫力満点の画面と、ジョン・ウェインの勇姿に酔いしれたのですが、「今日の日本」の行く末をつくづく考えさせられました。
- ・映画「黄色いリボン」は2回ほど見たことがあったが、3度目に見てみると懐かしさと当時の映画の雰囲気に戻って来て、楽しい2時間でした。映画オタクと自認する私にも忘れていたシーンがたくさんありました。よい機会をいただきました。
- ・遠いむかしに父と観た映画です。懐かしさで胸一杯です。良きアメリカのことを思い出しています。
- ・子供のころにテレビで見ていた西部劇。その中にもいろんな物語があったのだろう。今の世の中に失われたものがたくさんあったように思う。
- ・アメリカ先住民（インディアン）の土地を、白人が武力と悪知恵で侵略したことをまざまざと見せつけられました。
- ・騎兵隊は西部劇の原点です。
- ・まさに男の世界、大感激。
- ・何度か見ましたが、久しぶりに見て、改めて素晴らしい映画だと思い知りました。涙が出るほど感激しました。
- ・2年前に、今回の映画の舞台になった“モニュメント・バレー”に個人で旅行に行きました。とっても懐かしく見させていただきました。大変感動しました。
- ・退職して初めて主人と来ました。次回も楽しみです。お茶をごちそうさまでした。
- ・軍曹と大尉の掛け合いは楽しかったです。緊張した場では効果がありました。実際にはああはゆきませんけどね。
- ・日本的な“情”があり、素晴らしい。
- ・荒野を駆ける馬や馬車の様子は見ていてスカッとします。
- ・テレビで見るよりも迫力があり、音楽もとてもよかったです。『三人の名付親』が観たい。
- ・古い作品でしたが、古さを感じさせないほどの迫力がありました。
- ・学生時代に見た西部劇を、なつかしく見ました。
- ・久しぶりの西部劇、感激しました。ジョン・ウェイン サンキュー。
- ・これぞ西部劇という思い。気持ちのよい映画でした。
- ・大変よかったです。なつかしい西部劇！これからも、よき古き映画をお願いします。
- ・ユーモアもあり、迫力もあって、おもしろかったです。
- ・西部劇を楽しく拝見しました。
- ・よかったですよ。
- ・なつかしく楽しみました。
- ・大変楽しみました。よかったです。ありがとうございます。

注意



上映中の携帯操作は、周りの方の迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、観賞マナーを守り、終了後も明るくなるまで席を立たないようお願いします。上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。

### サロン・ド・シネマについて

6月～9月は、ホワイエが大変暑くなるため、サロンの開催をお休みさせていただいています。水分の補給等、各自でお願いいたします。

りぶらホールにはヒアリングループが設置されています。補聴器を利用されている方は、Tモードに切り替えてください。



## 第76回上映会のご案内

### 黄金の腕

字幕上映

HE MAN WITH THE GOLDEN ARM



6月20日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

フランキーは、ポーカー博奕の手入れでレキシントンの連邦麻薬対策病院で6ヵ月を過ごし、シカゴに舞いもどった。フランキーは以前の仲間に歓迎されるが、妻にレキシントンの病院で習ってきたドラムで生活しようと語る。しかし、車椅子に坐ったままの美しい妻ザッシュはそれを喜ばず、トランプ賭博で「黄金の腕をもつ男」といわれているくばり手の腕を使えとすすめる。

監督：オットー・プレミンジャー

出演：フランク・シナトラ

エリノア・パーカー

キム・ノヴァク

製作：1955年 アメリカ モノクロ 115分

### 2019年度の上映のご案内 (上映作品は変更になる場合があります。)

2020年1月～3月ホール改修工事のため、2019年度の上映会は下記の通りとなります。

第76回	6月20日(木)	『黄金の腕』	① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~
第77回	7月18日(木)	『ゴリオ爺さん』	① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~
第78回	8月22日(木)	『ティファニーで朝食を』	① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~
第79回	9月19日(木)	『自由を我等に』	① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~
第80回	10月17日(木)	『終着駅』	① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~
第81回	11月28日(木)	『キリマンジャロの雪』	① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~
第82回	12月19日(木)	『ビューティフルメモリー』	① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。